



社会医療法人 **仁厚会**  
 社会福祉法人 **敬仁会**

「主役はいつも患者さん」  
 地域に根差した医療と福祉を提供

**11**  
 LEADING  
 COMPANY

地域に求められる  
 サービスの追求とともに  
 成長を続ける

「主役はいつも患者さん」を行動規範として、常に患者と利用者の目線に立つて学ぶ姿勢を忘れず、地域に求められる医療と福祉を提供し続けるグループ、《社会医療法人 仁厚会》《社会福祉法人 敬仁会》。このグループを率いる藤井一博理事長は「患者さんご利用者へサービスを提供する上で、人材こそが最も大切な資源」と、職員一人ひとりが笑顔で生きがいを持って働ける職場づくりに尽力する。

仁厚会は、藤井理事長の祖父、藤井政雄氏が鳥取県中部地域に精神科の病院がなかったことを危惧し、昭和31年に民間病院として《倉吉病院》を設立したのが始まりだ。昭和33年には「鳥取県から、浮浪者をなくそう」との願いから敬仁会を設立し、心身に障がいのある人々を受け入れる施設として救護施設《敬仁会館》を開設した。この病院や施設の設立に至る考え方、そして、それに関わった人々の想いは今もなお同グループの偉大な財産として受け継がれている。

県中部唯一の精神科病院としての

使命を果たす中、高齢化した患者に認知症の治療や介護が要請されるようになったことから、昭和58年には民間として鳥取県下第一号となる特別養護老人ホーム《ル・ソラリオン》を開設。次いで、病院や施設利用者の利便性を考慮し、同じ敷地内に歯科部と内科病棟を開設した。そして、高齢者の終末期医療などの経験から平成15年には山陰地方初のホスピス《緩和ケア病棟》を備えた。

グループ規模の拡大と並行して、最も大切な資源である職員数も拡大。様々な生活スタイルの中で働く職員が増えた。子育てしながら働く職員のためにグループが運営する保育所《パール園》では、生後2カ月から就学前までの子どもを預かり、休日保育や障がい児保育、病児保育事業も手掛ける。現在ではグループだけでなく、中部地域全体の子育てに大きく貢献している。

平成19年には東京都葛飾区に介護老人福祉施設《ル・ソラリオン葛飾》を開設。次いで足立区内に高齢者施設を2か所開設した。現在は、仁厚会として10施設、敬仁会として16施設と大規模に事業を展開する。藤井理事長は「地域に求められるサービスと働く職員の皆さんに必要な施設を手掛けていった結果」と話す。

手厚いサポートで  
 心豊かに働ける職場

職員の心の充実や豊かな生活を応援するための福利厚生も手厚い。日帰り・海外を含む約10コースから選択可能な職員旅行は職員の楽しみとなっている。法人補助があるので費用面でも職員にやさしい。また、毎年10月にはグループ全体の大運動会を開催。各事業所の職員がスポーツを通じて交流を深めている。その他、互助会主催の親睦会を年数回行っており、趣向を凝らしたイベントが多い。

地域に密着した同グループならではの福利厚生。地元企業の優待サービスは、住まいから日用品、冠婚葬祭まで幅広く職員割引が受けられる。

職員からは「生活圏内で利用できて便利」と喜ばれている。スキルアップの為、各種研修への参加を奨励すると共に、グループ独自で《医療福祉学会》を毎年開催。医療や介護などそれぞれの現場で気づいたことや疑問を掘り起こして研究発表する場も設けている。自分の考えをまとめて大勢の前で発表する体験は職員にとって大きな刺激となっているという。

また、毎年開催している《ふれあいあまとまつり》には約3000名の来場があり、職員や利用者が屋台などを出して盛り上げ、地域からたくさんの方が訪れて同グループへの理解を深めている。



《社会医療法人 仁厚会》  
 《社会福祉法人 敬仁会》  
 グループの理事長 藤井一博氏



様々なステージイベントや屋台などで盛り上がる《ふれあいあまとまつり》。たくさんの方々が参加する

利用者目線のサービスで  
心に希望を灯す

鳥取県と東京都で多くの高齢者福祉施設を運営する同グループは、利用者が安心して自分らしく生活するための支援を行う。

倉吉病院や救護施設、介護老人福祉施設などの勤務経験を持つ青亀千弘さんは、現在、介護老人保健施設《ル・サンテリオン北条》の施設長を務める。救護施設の勤務時代には、利用者宅を訪問し、疎遠になりがちな利用者や家族の「絆の再構築」に職員一体となって取り組んだ。何十年ぶりの家族との再会や、一時帰宅が実現し、「あの経験は自分の財産」と振り返る。現在の職場では、ふざぎ込んでいた利用者が職員や他の利用者との交流で徐々に機能が回復する様子を目の当たりにすることもあり、「介護とは心が動く現場」という想いを胸に、自分がしてもらいたいと思えるような介護を目指す。同じように、「ご利用者の視点に立った対応を心がけたい」と話すのは、介護老人福祉施設《ル・ソラリオン》の西村愛理さん。鳥取短期大学を卒業後、敬仁会に入職。生活介助などを行うケアワーカーの仕事しながら介護福祉士国家試験に合格した。「講義の内容を現場で実践す

ることで納得もでき、先輩方にもわからないことをすぐに教えてもらえた」と周りのサポートに感謝する。

介護老人保健施設《ル・サンテリオン北条》の山下佳織さんは、子どもの頃の高齢者宅や高齢者施設でのボランティア経験から、高校卒業後に福祉の世界に入り、今は介護福祉士資格取得を目指す。「ご利用者の会話やコミュニケーションの時間が一番楽しいです」と笑顔を見せる。

食事を通して体調をサポート！

患者や利用者にとって、食事は体調をサポートする重要な役割を持つ。口からものを食べることは、体力の回復や体調の改善につながり、また日々の楽しみでもある。厨房で働く職員たちは、味はもちろん、見た目から食欲がわくように盛り付けにも気を配り、食事作りを通して患者や利用者の健康を気遣っている。管理栄養士の資格を持ち、《栄養ケアセンター倉吉病院厨房》で調理員として働く小澤佳奈さんもそのひとりだ。病院食に興味があり、地元での就職を希望して入職。入院患者に喜んでもらえる食事提供を目指して、2年目になる。「まずは調理の技術を上げて、今後は管理栄養士を生かした仕事に挑戦したい」と生き生きと語る。

あらゆる人が共生できる社会を

障がい者福祉では、生涯を通して寄り添う支援を念頭に利用者支援を行い、入所と在宅、グループホーム、宿泊型自立訓練事業所を運営。就労支援事業では、製麺や野菜の栽培、清掃、陶芸、内職から利用者が自分に合った作業をえらべる。障がい者支援施設《敬仁会館》の係長、西村恵美さんは「職員にはいろいろな学びの場があります。学んだことを現場で活かし、職員が楽しんで働いている姿を見ることができてうれしい」とほほ笑む。職員や部署間のコミュニケーションを普段から心がけ、スムーズな連携体制を構築。それぞれの力を持ち寄り、健康な人も、認知症の人も、障害のある人も、様々な人が「共に生き、共に働く」社会実現に貢献したい」と語る。

寄り添い、信頼される看護

鳥取県中部地域で唯一、精神科の入院設備があり、緊急対応も行う《倉吉病院》。精神科は一般病棟と異なり、長期的な関わりが重要で、患者との信頼関係を築きやすいという。看護部長を務める宮脇映子さんは「自分との関わりを通して健やかになっていかれる姿を見るとやりがいを感じます」とほほえむ。うつ病や適応障害など、こころの病で訪れる人は増えているが、精神科の受診をためらう人は未だ多く、宮脇さんらは精力的に地域への啓発に取り組んでいる。

《藤井政雄記念病院》で働く井崎かほるさんは、ケアワーカーだったが、「ご利用者の急変に対応を」と看護の道へ。当時、職場である地域ケアセンター《マグノリア》の上司に相談すると「夢を応援したい」と人手が十分でない中で背中を押してもらった。その後、看護学校の実習先だった《訪問看護リハビリテーションくらよし》での勤務を経て、病棟勤務で当時の経験を生かし、患者に寄り添った看護を実践。「先輩方のような信頼される看護師になりたい」とやる気を見せる。



元気の源となる食事を丹精込めて用意

広く清潔な各厨房で、病院や施設の食事をつくっている。何百人という患者や利用者のそれぞれの状態に合わせて常食、刻み食、塩分制限食など多種類を用意。食欲がない人でも、食べたくるように盛り付けにも心を配る。



利用者の楽しみとなる催しを企画

お正月の餅つきやお茶会など季節ごとに様々な行事を催し、季節や料理に合わせた衣装で目の前で調理する「面前調理」は、食欲が増して笑顔になると好評。同法人の保育所《パパール園》の園児との交流も盛んで、グループ間で連携している。

明るい笑顔で利用者に希望の光を灯す

同グループのどの施設でも、職員たちは「毎日楽しい！」と明るい笑顔で利用者へ接し、利用者目線に立った丁寧で誠実な対応を心がけている。資格取得などの職員の成長を積極的にサポートし、資格取得費用の支援なども行う。



人を大切にして、存在を敬う

施設内には芝生の庭があり、利用者たちがグランドゴルフなどで体を動かす。大会にも出場しており、日頃の練習の成果を発揮している。また、就労支援事業の一環としてパン工房も運営し、「共に生き、共に働く」社会を実践する。



働きやすい環境を整え、良質な看護を提供

アットホームな環境で、院内には入院患者の方々の作品掲示も。看護の現場は女性職員が多いが、法人の保育園に預けて子育てと仕事を両立しながら生き生きと働いている。精神科病棟は一般病棟と比べて残業が少なく、時短勤務も可能という。



社会医療法人 仁厚会／社会福祉法人 敬仁会

業種 医療・福祉

事業内容 病院、高齢者施設、障がい者施設、保育所の運営

創業 [仁厚会] 昭和30 (1955) 年11月1日 [敬仁会] 昭和33 (1958) 年6月6日

代表者 理事長 藤井 一博

社員数 [仁厚会] 1048名 (男314名 女734名)  
[敬仁会] 1237名 (男386名 女851名)

〒682-0023 鳥取県倉吉市山根43

TEL / [仁厚会] 0858-26-1012 TEL / [敬仁会] 0858-26-3864

https://www.med-wel.jp/

- [倉吉市] ●病院 医療福祉センター倉吉病院、藤井政雄記念病院
- 高齢 介護老人福祉施設ル・ソラリオン、他3施設
- 障がい 在宅医療福祉センター、他1施設
- 保育 ババール園、倉吉市立上井保育園 (指定管理)
- [湯梨浜町] ●高齢 介護老人保健施設ル・サンテリオン東郷
- 障がい 救護施設ゆりはま大平園
- [北栄町] ●高齢 介護老人保健施設ル・サンテリオン北条
- [鳥取市] ●高齢 介護老人保健施設ル・サンテリオン鹿野、他1施設
- [米子市] ●病院 米子東病院
- 高齢 介護老人保健施設ル・サンテリオンよどえ、他1施設
- 障がい 救護施設よなご大平園
- 保育 大和保育園、よどえババール園
- [大山町] ●高齢 介護老人福祉施設ル・ソラリオン名和
- [東京都] ●高齢 介護老人福祉施設ル・ソラリオン葛藤、他2施設
- 保育 あやせババール園

求める人材像 Check!!

当法人の業務は人と関る仕事ですので、人物重視の採用を行います。

- 医療や福祉に興味のある人
- 一生懸命に取り組む人
- 素直で向上心のある人
- やわらかな発想が出来る人
- 幅広い趣味や特技をもち仕事に活かせる人

人に興味を持ち、人と接することが好きな方にぜひお会いしたいと思います。

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

090-1350-3073

採用直通 E-mail

saiyo@med-wel.jp

公式サイトは  
こちら



資料請求 インターンシップ 会社見学

連携を強めコロナ禍に立ち向かう

新型コロナウイルスという未曾有の災禍にグループ内でも対応に追われた。例年実施していた行事は全て中止、会議や研修もオンライン化が加速した。そんな我慢も多い日々でも、職員たちが楽しんで働けるよう、施設内でのエアロビ教室やおもしろ動画コンテストなどの企画を実施した。そして、感染症対策では医療・福祉に携わる者として絶対にウイルスを持ち込まないために「持ち込ま

ない・持ち込ませない・利用者を守る」を法人方針とし、職員一丸となつて励んでいる。  
「変動の時代を生き抜くキーワードは『連携』だと思います。施設や法人、地域社会との連携を強く太くしていき、職員と地域の皆さまがこれからも安心して暮らせるよう、迅速に時代の波をとらえていきたい」と藤井理事長。目指すは医療・福祉のトップランナー。「誰かの役に立っている」と実感し、自分の適性や可能性を引き出せる職場がここにある。



1 エアロビで心身ともにリフレッシュ 2 病院の外來受付には飛沫遮断用板を設置

「専門研修や、マネジメント研修など学ぶ機会を多く設け、職員のスキルアップしたい気持ちに応援してくれています」と語り、自身も管理者として、定期的な面接や声掛けを行い、経験年数に関係なく意見が言い合えるようワークショップを催すなど様々な工夫している。「次世代を担う子どもたちを育てるには、まず私たち保育士が元気であ

り、保育の基本を実践することが大事。保育は人なり。子どもたちの成長を日々見守れる保育士の仕事を広く知ってもらいたい」と呼びかける。保育士の家高恵里さんは、ババール園が実践する「子どもの力を最大限に伸ばす保育」に魅力を感じ、専門学校卒業後に入職。現在11年目だ。この間、2回の育児休暇を取得し、同じ園に子どもを預けながら他クラスを担当する。  
「子どもたちがかわいくて、笑顔で応えてくれるのもうれしい。成長を間近で感じられる保育士の仕事は本当に楽しい」と笑顔が輝く。園では世代間交流も盛んだ。同じグループの介護施設に向かい、高齢者の前で園児がダンスや歌を披露したり、一緒に陶芸体験したりと連携し、「子どもたちも多様な経験ができてい」と好影響を実感する。  
いきいきと働く家高さんの姿に影響を受けて、「私も働きたい」と公立保育園からババール園へ転職してきた友人もいる。「人間関係が良いのが一番。意見を出しやすく、相談もしやすいです。笑顔を忘れずに憧れの先生に近づいていきたいです」とほほえみ、今も一緒に働く友人や、同僚、先輩とともに子どもたちに向き合う。



医療福祉学会

仁厚会・敬仁会では職員研鑽の機会の一つとして、医療福祉学会を開催している。日常業務の質向上に向けた取り組み・工夫・ノウハウ等を各部署のみに留めることなく職員全体で共有することで、より質の高いサービスの提供につながるようとの思いが込められている。近年は新型コロナウイルスの発生を受けてオンラインでの開催となっているが、様々な視点で学ぶことが出来る学会を通して更なる質向上を目指し、地域へ恩返しできるような努めている。

職員の成長を応援！  
子どもたちの笑顔を守る

保育所《ババール園》は倉吉病院職員の子どもの預かる託児所から発展、また倉吉市から保育所《上井保育園》の指定管理も受託するなど、現在グループでは5園の保育所を運営。高齢者、障がい者福祉と合わせて児童福祉にも力を入れている。平成27年開設の保育所《あやせババール園》がル・ソラリオン綾瀬に併設する介護と福祉の複合施設であるのも、そのあらわれといえる。

17年前に保育士として入職し、現在は上井保育園園長の吉岡麻弓さんは「法人理念を基本とし、保育士たちの特色も生かしながら、保護者の皆さまに安心してもらえる保育を実践しています」と語る。グループ以外の保育園での勤務経験もある吉岡さんは、福利厚生の実感している。「専門研修や、マネジメント研修など学ぶ機会を多く設け、職員のスキルアップしたい気持ちに応援してくれています」と語り、自身も管理者として、定期的な面接や声掛けを行い、経験年数に関係なく意見が言い合えるようワークショップを催すなど様々な工夫している。「次世代を担う子どもたちを育てるには、まず私たち保育士が元気であ



子どもの成長を支え、自らも成長できる環境

より良い保育の実践のために、職員がスキルアップする機会を多く設け、安全な保育のための指導にも取り組んでいる。天気の良い日は3～5歳児が園庭と一緒に食事をすることも。青空の下で食べるご飯は一層美味しく感じられそうだ。